

かん ばやし ひろ し
神 林 博 史

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 188 号
学位授与年月日	平成17年3月10日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 人間科学専攻
学位論文題目	階層意識とジェンダーに関する計量社会学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 原 純 輔 教授 海野道郎 教授 佐藤嘉倫 教授 鈴木淳子 助教授 木村邦博

論文内容の要旨

本研究では階層意識とジェンダーの関係を総合的に分析する。ここで階層意識とは、階層帰属意識、生活満足感、不公平感、政治意識など、社会階層による不平等の認識と評価に関する諸意識を指す。従来の階層研究あるいはフェミニズム研究は、女性の社会経済的地位が男性のそれよりも低いものであることの実態の指摘と、そのような不平等の形成・維持のメカニズムに注目してきた。一方で、階層意識に含まれる諸意識の分布を男女で比較すると、女性の階層意識は「ジェンダーによる不平等」を必ずしも直接的に反映していないことが知られている。なぜこのような現象が生じるのか、そしてこのことはどのような意味を持っているのか、これが本研究の課題である。

第1章「問題の所在」では、社会階層とジェンダーの関係、社会階層研究における階層意識研究の内容と意義、そして階層意識とジェンダーの関係を検討することの重要性について検討した。社会階層研究とは、ごく大まかに言えば不平等についての研究である。そして、社会的な不平等を生み出す重要な要因の1つとしてジェンダーがある。社会階層論・社会階級論の文脈の中にジェンダーをどのように位置づけるかについては、様々は研究がなされてきた。近年では、社会階層とジェンダーは相互に密接に関連しあうものであり、もはやジェンダー抜きに階層論は成立し得ないという認識でほぼ一致を見ている。一方、階層意識研究は人々が社会階層に由来する不平等に関してどのように考え、そして社会的な結果へとつなげてゆくのかを把握するために行われる。したがって、階層意識とジェンダー、および社会階層の関係を検討することは重要な課題のはずである。

ところが、ジェンダーと階層意識の関係はこれまでは十分に検討されてこなかった。この原因は主に階層意識研究の研究史と、ジェンダーに直接的に由来する不平等に関する意識（性別役割意識）の研究史に由来すると考えられる。階層意識とジェンダーの関係の検討は、従来は階層帰属意識・階級帰属意識とジェンダーの関係、具体的には女性の階層帰属意識の規定因探しを中心的な問いとしてきた。しかし、(第3章で検討するように) この問いは理論的な社会階層の構成要素と、階層帰属意識の規定要因の探求を混同しており、端的に言って錯誤である。このことが広く認識された現在、階層帰属意識とジェンダーに関する研究は定点観測か国際比較的なものにシフトしており、新たな問いが見出し難くなっている。一方、性別役割意識の研究は、「性別役割が平等化することが、社会のジェンダー格差の平等化をもたらす」との見込みを前提として行われてきた。しかし、実際には性別役割意識の平等化は、現実とはパラレルに対応しないことが徐々に明らかになっていった。これにより、現在の性別役割意識研究は停滞期に入ったように見える。このように、階層意識とジェンダーの関係、あるいは性別役割意識研究は、研究で得られる意識の様態と、現実におけるジェンダーによる不平等の実態の間の乖離に直面しており、いずれも袋小路に陥っている。

しかし、階層意識とジェンダーの関係を総合的に捉えなおすこと、単独の意識項目の挙動でなく、複数の階層意識間の関係性とジェンダーおよび社会階層の関係を検討することで、階層意識研究に新たな可能性を開くことができると考えられる。少なくとも、上述のような意識と現実との乖離をどのように考えるべきかが、ある程度明確に見えてくるだろう。これが本研究の基本的な視角である。

本研究ではHara (1998) に準拠した階層意識項目とその区分を用いる。すなわち、本研究で「階層意識」として検討するのは、満足系意識（生活満足感、階層帰属意識）と政治系意識（不公平感、政治意識）である。第2章で詳述するように、女性の客観的な社会経済的地位と、女性の満足系意識および政治系意識の間に存在するパラドキシカルな関係—直感的には矛盾するように見える関係—を解明することが本研究の焦点となる。

また、本研究では階層意識の規定因としてのジェンダーを社会的地位の一種とみなし、この観点から導かれる心理的メカニズムによる検討を行う。生物学的決定論のような本質主義的な議論は忌避すべき対象とみなす。

第2章「女性の階層意識のパラドクス」では、階層意識とジェンダーに関わる具体的な問題として「女性の階層意識のパラドクス」を提示した。「女性の階層意識のパラドクス」とは、女性の階層意識の様態に関する、次のような3つのパラドキシカルな現象の総称である。

まず、階層意識とジェンダーの関係について、次のようなよく知られた事実が存在する。

- ・満足系意識は、階層帰属意識、生活満足感とも女性の方が男性より高い。
- ・政治系意識は、女性の方が全般的に不公平感が高い。また、女性の方が政治に関して消極的（政治的関心が低く、政治的有効性感覚も低い）である。

これらの傾向の間には、いくつかのパラドキシカルな要素が存在する。具体的には、以下の3点である。

パラドクスⅠ：一般に女性の社会経済的地位は男性のそれより低いのに、生活満足感や階層帰属意識が男性のそれより高いのはなぜか。

パラドクスⅡ：女性の社会的地位の向上はそれ自体が政治的問題であり、その推進がなされている。

にもかかわらず、その利害当事者である女性の政治意識は男性のそれより消極的であるのはなぜか。パラドクスⅢ：生活に満足し、社会における自分の位置を高く認識しているのであれば、そのような社会を不公平だとは思わないだろう。にもかかわらず、女性の不公平感が男性より高いのはなぜか。

第2章では、まず、上述のパラドキシカルな傾向が一般性を有したものであることを各種調査データから確認した。そして、女性の階層意識のパラドクスの暫定的な説明モデルとして「女性の階層意識のパラドクスに関する合理化モデル」を提唱した（以下「合理化モデル」と略す）。これは、相対的剥奪の理論および認知的不協和の理論を階層意識の問題に援用したものである。

合理化モデルの概要は次のようなものである。まず基本的な仮定として、現代日本社会における女性はどちらかと言えば現状の変革可能性を低くみる傾向がある、と考える。ここで言う「現状」とは、社会経済的な地位達成のジェンダー格差のことを指す。具体的には、女性は男性よりも賃金が低い、就職が限定されている、昇進機会が限定されている、等である。この時、次のような心理的メカニズムを考えることができる。

- (1) 女性の置かれている状況への不満は、不公平感を高めるだろう。
- (2) 現状の改善が困難であるという認知は無力感を引き起こし、政治的有効性感覚や政治的関心を引き下げるだろう。（あるいは、政治的有効性感覚は「現状の改善が困難である」ことの直接的な指標と考えてもいいかもしれない。）
- (3) 現状の改善が困難であるという認知自体も、不公平感を高めるだろう。
- (4) この結果、女性は自らのアスピレーション・レベルを男性のそれより低く設定する。それは高すぎるアスピレーションを持つことによって生じる認知的不協和を低減した結果とも言えるし、そのことを予期して認知的不協和を回避した結果とも言える。最終的には、階層帰属意識や生活満足感 は男性のそれよりも高くなる。

この合理化モデルがどの程度の「女性の階層意識のパラドクス」の説明に有効であるのか、合理化モデルよりも適切なモデルがあるとすればそれはどのようなものかが、本研究の主要な検討課題である。なお、本研究では、(1)「社会階層と社会移動」全国調査（SSM調査）、(2)「投票行動の全国的・時系列的調査」調査（JES2調査）、の2つのデータセットを用いた2次分析による検討を行う。

ただし、残念ながら本研究が用いるデータでは合理化モデルを完全に検証することはできない。特に、このモデルでキーとなる2つの心理メカニズム—「現状の変革可能性の認知」と「(満足系意識の)合理化」は、データの中で直接的に測定されないため、最後までブラックボックスのままに留まってしまふ。本研究が行うのは、合理化モデルの間接的な確認である。例えば、階層帰属意識の分布の男女差が、合理化によって生じているのだとしたら、女性の中でも社会経済的な状態や現状変革に関する不満を抱きやすいと思われる層で、階層帰属意識の男女差が大きくなるはずである。したがって、男女差はフルタイム労働者よりもパートタイム労働者や自営業層で大きくなると予想できる。こういった形での検証を積み重ねていくことで、全体としてのモデルの当否を検討する。

以下、第3章から第5章までの各章では、階層意識の各要素、階層帰属意識（第3章）、全般的な不公平感（第4章）、政治意識（第5章）とジェンダーの関係について検討する。第6章では、階層意識の回答パターンに注目し、階層意識を総合的に捉えた検討を行う。

第3章「階層帰属意識とジェンダー」では、階層帰属意識とジェンダーの関係について検討した。階層帰属意識は、「社会経済的地位は一般に女性の方が低いにもかかわらず、階層帰属意識は女性の方が高い」という傾向があることが知られている。ただし、このような問いは階層帰属意識とジェンダーの関係に関する研究の中ではほとんど注目されてこなかった。第3章では、まず階層帰属意識研究の歴史を振り返り、階層帰属意識とジェンダーに関する研究が何を明らかにしようとしてきたのか、そして「社会経済的地位は一般に女性の方が低いにもかかわらず、階層帰属意識は女性の方が高い」ことを問うことが、階層帰属意識研究の文脈の中でどのように位置づけられるのかを説明した。

階層帰属意識とジェンダーの関係に関する先行研究における中心的な問い－「女性の階層帰属意識は何によって決まるか」という問い－の構造は、理論的に構築される階層と階層帰属意識の規定要因の関係を同一視する一種の錯誤を前提としており、必ずしも有効なものではない。一方、本研究が扱う階層帰属意識の分布の男女差の問題は、階層帰属意識の形成メカニズムを考える上で重要なポイント（階層帰属意識の判断水準の問題）と関連しており、現代的な意義も高い。

では、女性の階層帰属意識の高さはどのように説明されるのか。このことを解明するために、先駆的な研究である数土（1998、2003）のモデルに依拠した検討を行った。数土モデルの基本的な枠組みは、階層帰属意識の分布の男女差を主に教育の効果から説明するものである。とは言え、このモデルには理論・実証の両面で不十分な点がある。これらを指摘した後、問題点を改善したモデルによる検討を行った。具体的には、数土モデルでは十分に検討されていなかった職業と就業形態の効果を加味したモデルである。分析の結果、階層帰属意識の男女差は、主に職業階層の低い層、すなわちパートタイム層と自営業層で生じていることが明らかになった。これは（必ずしも十分ではないものの）合理化モデルに適合的な結果と言える。なお、生活満足感については補論で検討した。

第4章「全般的不公平感とジェンダー」では、全般的不公平感とジェンダーの関係を検討した。全般的不公平感については理論・実証両面において、つとにその「曖昧さ」が指摘されてきた。本章では、先行研究で検討されてきた全般的不公平感の形成メカニズムを系統的に整理し、これらを統合したモデルを用いることで、全般的不公平感の「意味」および、不公平感とジェンダーとの関係の解明を試みた。

しかし、結果としては全般的不公平感が何を意味しているか、どのようにして形成されるかについて明確な像を提示することはできなかった。ジェンダーとの関連について言えば、ジェンダーは全般的不公平感を高める効果を持ち、また女性に特有な不公平感形成のメカニズム（権威主義と結びついた「公平」認識）も見出されたが、これらの効果はごく弱いものに過ぎない。全般的不公平感は様々な心理変数によって規定されるが、特に有力な説明原理は存在せず、様々な社会認識、および心理メカニズムのアマルガムとして存在している。全体としては、ジェンダーは直接・間接のいずれの形でも全般的不公平感に大きな影響を与えているとは言えず、合理化モデルには適合しないことが示された。

第5章「政治意識とジェンダー」では、政治意識とジェンダーの関係について検討した。一口に「政治意識」といってもその内容は膨大である。本章では、政治意識のうち最も根本的な部分、政治に対して能動的・積極的に参加するか否かという面に関わる意識である政治的有効性感覚と政治的関心を分析の対象とした。

女性の政治意識が男性に比べて消極的であることはよく知られており、政治学あるいは政治意識研究の文脈ですでに多くの検討がなされている。本章ではデータの都合から、合理化モデルの直接的な検討は行わず、次のような間接的な検証法を採用した。すなわち、従来の政治意識研究で考えられていた

ジェンダー・ギャップを生み出す3つの要因—心理的要因（政治的社会化、性別役割の社会化による効果）、構造的要因（年齢、学歴の男女格差による効果）、状況的要因（女性の置かれた状況と政治的資源の関係による効果）—に対応した変数をコントロールし、政治意識の男女差がこれらの要因によって説明し尽くされるのかを検討するというものである。もし、3つの要因をコントロールしてもジェンダーの効果がある程度残存するのであれば、合理化モデルが成立する余地があると考えられる。

分析の結果、従来の政治意識論の枠組みでは、政治意識のジェンダー差を完全には説明できないことが明らかになった。しかし、一方で残されたジェンダーの効果が何に由来するものなのか、残念ながら明確な結論は得られなかった。

第6章「階層意識の回答パターンによる検討」では、階層意識の回答パターンに関する検討を行った。まず「女性の階層意識のパラドクス」に見られる階層意識の回答パターンが、合成の誤謬であるか否かを確認した。ここで言う「合成の誤謬」とは、「女性の階層意識のパラドクスに相当する『満足系意識が高く、かつ不公平感が高く、かつ政治意識が低い』という回答パターンは、特徴的な回答傾向を有するいくつかのグループの回答が合成された結果であって、実際にはそのような回答パターンを持つ回答者もしくはグループは存在しない」という問題のことである。このことを検討するため、階層意識のクラスター分析を行い、4つのクラスターを析出した。そして、クラスターの1つは確かに「女性の階層意識のパラドクス」のパターンを描いていること、そしてこのクラスターは実際に女性が多いことの2点を確認した。

次に、各クラスターの特徴について社会経済的変数および意識変数との関連の分析を行った。「女性の階層意識のパラドクス」のクラスターに属する人々は、社会経済的地位が相対的に低いことが明らかになった。経済的地位に関しては、最下層というわけではなく、4つのクラスターの中では下から2番目に位置づけられる。また、職業に関しては、主にブルーカラー層によって構成されている。つまり、このクラスターに属するのは「それなりに豊かなブルーカラー」とでも言うべき人々である。

「女性の階層意識のパラドクス」のクラスターに属する人々の心理的傾向としては、権威主義的傾向およびそれに由来すると思われる現状肯定的傾向が観測された。すなわち、このクラスターの人々は権威主義的傾向が強く、私生活面では不安を抱えており、社会の様々な問題について互いに矛盾するような要素を持つ質問に対しても全て肯定的に答える傾向がある（つまり、イエス・テンデンスがある）。このような権威主義的傾向と結びついた現状肯定的な心理傾向は、合理化モデルを支持していると思われる。とは言え、以上のような分析を行っても、合理化モデルは完全には検証されたとは言えず、政治意識とジェンダーの関係については謎のまま残された。

また、本章の分析、および第3章から第5章までの分析結果を総合的に検討すると、「女性の階層意識のパラドクス」自体を解体・再構成する必要があることが明らかになった。すなわち、全般的な不公平感に関するパラドクスⅢは、不公平感の曖昧な性質から生じた擬似的な問題であり、合理化モデルの説明対象からは除外される。残るパラドクスは2つであるが、すでに述べたようにパラドクスⅠについては肯定的な証拠が得られ、基本的には合理化モデルに適合すると考えられる。ただし、本章で検討した「女性の階層意識のパラドクス」クラスターの経済的地位と合理化モデルから導かれる予想は、必ずしも整合的ではない部分も存在するが、第5章でも明確な結論が得られなかった政治意識とジェンダーとの関係、すなわちパラドクスⅡについては、第6章の分析結果を加味しても結局のと同じく明確な結論を得ることはできなかった。

第7章「女性の階層意識のパラドクスの終着点」では、本研究の分析の成果を踏まえ、本研究の問題点と研究の意義を説明した。

まず問題点について。本研究の最大の問題点は、モデルに関する直接的な検証がなされていないことである。本文中でも再三述べてきたが、「現状の変革可能性に関する認知」と「合理化の結果としてのアスピレーション・レベルの低下」という、モデルのキーとなるメカニズムが2つとも検証できなかったのは痛い。本研究の成果は、いわば状況証拠を積み重ねたに過ぎない。もちろん、状況証拠も十分な質と量が保証されれば、有効な証拠となりうるが、本研究の場合はそこまでの蓄積はない。「女性の階層意識のパラドクス」に関する、1つのあり得る可能性を提示したに過ぎない。これは、本研究が2次データの分析であることに由来するものであり、将来的にはこの枠組みをより厳密に検討できる調査を行う必要があるだろう。

次に、「女性の階層意識のパラドクス」に相当する意識パターンを有する人々（第6章におけるクラスター3に属する人々）が、社会や生活に対してどのように考え、日々を暮らしているのかの具体的なイメージを十全に描き出すことができなかった。これはデータの制約上、止むを得ない面もあるのだが、第6章で検討した「女性の階層意識のパラドクス」のクラスターについてのリアリティある記述には成功していない、と言い換えてもよい。

また、計量的手法に関わる問題として、本研究のような線形モデル（重回帰モデル）中心のアプローチが本当に手法として適切なのか、という問題も残る。また、GSSデータなどを用いた国際比較アプローチは、本研究のテーマを展開する上で重要であったが、残念ながら行うことができなかった。

次に本研究の学術的・社会的意義および今後の可能性について。本研究の最も大きな知見の1つは、「女性の階層意識のパラドクス」の傾向を具現するクラスターの社会経済的特性と心理的傾向を明らかにしたことである。「女性の階層意識のパラドクス」的な意識パターンを持つのは、社会経済的な地位は相対的に低く、権威主義的傾向と現状肯定的を有する人々（主に女性）であった。このことには、さらに2つ意義がある。

第1に、権威主義的態度研究の新たな可能性を提示したことである。権威主義的態度研究は、ファシズム研究を出発点としながらも、広範な社会学的応用がなされてきた。本研究が示した階層意識の回答パターンと権威主義的態度の関係は、権威主義的態度が社会意識の1つのコアとして、依然として重要な役割を果たしていることを示している。

第2に、この問題は学術的なレベルに留まらず、広く社会的な文脈でも重要である。本研究が示したのは、客観的に見て不利な立場にいるもの（＝女性）が、必ずしもその状況に対して強く抵抗するような意識を持たないこと、そしてそのような態度がどのように形成されるのかというメカニズムである。このような問題のより今日的な相として、「努力してもしょうがない社会」（佐藤 2000）、「インセンティブ・ディバイド」（荻谷 2001）、「希望格差社会」（山田 2004）、あるいは「勝ち組・負け組」、「フリーター」、「ニート」といった階層分化・階層間格差の拡大に関わる心理的問題があげられる。これらの問題は、現在の日本社会が直面している社会階層間の格差に関わる非常に重要な問題である。本研究の知見がこれらの問題にどの程度応用できるか否かは未知数であるが、例えば「努力してもしょうがない社会」の奥底にある心理的傾向は、「女性の階層意識のパラドクス」を支える心理的傾向とそれほど遠いものではないと思われる。

論文審査結果の要旨

本論文は、階層意識とジェンダーとの関係に、主として計量的方法を用いて総合的な分析を加えたものである。ここで階層意識とは、階層帰属意識、生活満足感、不公平感、政治意識など、社会階層による不平等の認識と評価に関する諸意識を指す。従来の階層研究あるいはフェミニズム研究は、女性の社会経済的地位が男性のそれよりも低いものであることの実態の指摘と、そのような不平等の形成・維持のメカニズムに注目してきた。一方で、階層意識に含まれる諸意識の分布を男女で比較すると、女性の階層意識は「ジェンダーによる不平等」を必ずしも直接的に反映していないことが知られている。なぜこのような現象が生じるのか、そしてこのことはどのような意味を持っているのか、これが本論文の基本的な課題である。

第1章「問題の所在」では、社会階層とジェンダーは相互に密接に関連しあうものであり、もはやジェンダー抜きに階層論は成立し得ないという認識でほぼ一致を見ているにもかかわらず、階層意識とジェンダーの関係、あるいは性別役割意識研究は、研究で得られる意識の様態と、現実におけるジェンダーによる不平等の実態の間の乖離に直面しており、いずれも袋小路に陥っていると指摘する。

代わって本論文がとろうとするのは、階層意識とジェンダーの関係を総合的に捉えなおすこと、単独の意識項目の挙動でなく、複数の階層意識間の関係性とジェンダーおよび社会階層の関係を検討すること、具体的には、女性の客観的な社会経済的地位と、満足系階層意識（生活満足感、階層帰属意識）および政治系階層意識（不公平感、政治意識）の間に存在する、直感的には矛盾するよう見えるパラドキシカルな関係を解明するという方向である。これにより、階層意識研究に新たな可能性を開くことができるだろうと主張する。

第2章「女性の階層意識のパラドクス」では、階層意識とジェンダーに関わる具体的な問題として「女性の階層意識のパラドクス」を提示する。「女性の階層意識のパラドクス」とは、女性の階層意識の様態に関する、次の3つのパラドキシカルな現象の総称である。

パラドクスⅠ：一般に女性の社会経済的地位は男性のそれより低いのに、生活満足感や階層帰属意識が男性のそれより高いのはなぜか。

パラドクスⅡ：女性の社会的地位の向上はそれ自体が政治的問題であり、その推進がなされている。

にもかかわらず、その利害当事者である女性の政治意識は男性のそれより消極的であるのはなぜか。

パラドクスⅢ：生活に満足し、社会における自分の位置を高く認識しているのであれば、そのような社会を不公平だとは思わないだろう。にもかかわらず、女性の不公平感が男性より高いのはなぜか。

次に、これらのパラドクスの暫定的な説明モデルとして「女性の階層意識のパラドクスに関する合理化モデル」を提唱した（以下「合理化モデル」と略す）。これは、社会心理学における相対的剥奪の理論および認知的不協和の理論を階層意識の問題に援用したものであるが、この合理化モデルがどの程度の「女性の階層意識のパラドクス」の説明に有効であるのか、合理化モデルよりも適切なモデルがあるとなればそれはどのようなものかが、第3章以下で検討される。

第3～5章では、(1)「社会階層と社会移動全国調査」(SSM調査)、(2)「投票行動の全国的・時系列的調査」(JESⅡ調査)という2つのデータセットを用いた二次的計量分析による検討が行われる。

第3章「階層帰属意識とジェンダー」では、階層帰属意識とジェンダーの関係について検討している。これまでの研究における「女性の階層帰属意識は何によって決まるか」という中心的な問いは、理論的に構築される階層と階層帰属意識の規定要因の関係を同一視する一種の錯誤を前提としており、必ずし

も有効なものではない。他方、「社会経済的地位は一般に女性の方が低いにもかかわらず、階層帰属意識は女性の方が高いのはなぜか」を問うことこそが、階層帰属意識の形成メカニズムを考える上で重要なポイント（階層帰属意識の判断水準の問題）と関連しており、現代的な意義も高いと主張する。

具体的には、数土直紀による先駆的な研究に依拠しながら、数土モデルの問題点を改良したモデルによる分析を行い、階層帰属意識の男女差は、主に職業階層の低い層、すなわちパートタイム層と自営業層で生じていることが明らかになった。これは（必ずしも十分ではないものの）合理化モデルに適合的な結果と言える。

第4章「全般的な不公平感とジェンダー」では、全般的な不公平感とジェンダーの関係を検討している。全般的な不公平感については理論・実証両面において、つとにその「曖昧さ」が指摘されてきた。本章では、先行研究で検討されてきた全般的な不公平感の形成メカニズムを系統的に整理し、これらを統合したモデルを用いることで、全般的な不公平感の「意味」および、不公平感とジェンダーとの関係の解明を試みているが、合理化モデルは適合せず、全般的な不公平感が何を意味しているか、どのようにして形成されるかについて明確な像を提示することには成功していない。全般的な不公平感は様々な心理変数によって規定されるが、特に有力な説明原理は存在せず、様々な社会認識、および心理メカニズムのアマルガムとして存在していると述べている。

第5章「政治意識とジェンダー」では、政治意識（とくに政治の有効性感覚と政治的関心）とジェンダーの関係について検討している。女性の政治意識が男性に比べて消極的であることはよく知られている。本章では、従来の政治意識研究で考えられていたジェンダー・ギャップを生み出す3つの要因-心理的要因（政治的社会化、性別役割の社会化による効果）、構造的要因（年齢、学歴の男女格差による効果）、状況的要因（女性の置かれた状況と政治的資源の関係による効果）-に対応した変数をコントロールし、政治意識の男女差がこれらの要因によって説明し尽くされるのかを検討している。その結果、3つの要因をコントロールしてもなおジェンダーの効果がある程度残存しており、残る有力な説明としての合理化モデルが成立する余地があることが明らかにされた。

第6章「階層意識の回答パターンによる検討」では、階層意識の回答パターンに関する検討を行っている。階層意識のクラスター分析を行って4つのクラスターを析出し、クラスターの1つは確かに「女性の階層意識のパラドクス」のパターンを描いていること、そしてこのクラスターは実際に女性が多いことの2点を確認している。

「女性の階層意識のパラドクス」のクラスターに属する人々は、社会経済的地位が相対的に低いけれども、経済的地位に関しては最下層というわけではなく、4つのクラスターの中では下から2番目に位置づけられ、また職業に関しては、主にブルーカラー層によって構成されている。つまり、このクラスターに属するのは「それなりに豊かなブルーカラー」とでもいうべき人々であることを明らかにした。これらの人々の心理的傾向としては、権威主義的傾向およびそれに由来すると思われる現状肯定的傾向が観測された。すなわち、このクラスターの人々は権威主義的傾向が強く、私生活面では不安を抱えており、社会の様々な問題について互いに矛盾するような要素を持つ質問に対しても全て肯定的に答える傾向がある。このような権威主義的傾向と結びついた現状肯定的な心理傾向は、合理化モデルを支持していると思われる。

第7章「女性の階層意識のパラドクスの終着点」では、本論文の分析の成果を踏まえ、問題点と研究の意義を説明している。

後者について述べれば、本論文の最も大きな知見は、「女性の階層意識のパラドクス」の傾向を具現するクラスターの社会経済的特性と心理的傾向を明らかにしたことであり、「女性の階層意識のパラドク

ス」的な意識パターンを持つのは、社会経済的な地位は相対的に低く、権威主義的傾向と現状肯定的を有する人々（主に女性）であったと主張する。さらにこのことは、権威主義的態度研究の新たな可能性を提示するものであり、「努力してもしょうがない社会」、「インセンティブ・ディバイド」、「希望格差社会」、あるいは「勝ち組・負け組」、「フリーター」、「ニート」といった、今日の階層分化・階層間格差の拡大に関わる心理的問題にも示唆を与えるものである。たとえば「努力してもしょうがない社会」の奥底にある心理的傾向は、「女性の階層意識のパラドクス」を支える心理的傾向とそれほど遠いものではないと思われる、と結んでいる。

以上の要旨からも明らかなように、本論文では、(1)まず、階層意識とジェンダーの関係、あるいは性別役割意識研究が袋小路に陥っている原因を考察して、(2)問題を設定し直し、(3)次に、その問題を説明するための理論的モデルを選択し、(4)さらに、そのモデルから計量的仮説を誘導して、(5)データによって検証する、という手順が一貫してとられている。具体的には、(2)「女性の階層意識のパラドクス」という問題の設定が行われ、(3)「女性の階層意識のパラドクスに関する合理化モデル」（合理化モデル）を提唱した。残念ながら、(5)データによる検証の結果は、必ずしも合理化モデルを支持するものではなかった。その原因の1つは、著者が直接設計した調査データではなく、もっぱら二次データの分析によっているからであり、この点は、本論文の最大の問題点といえるであろう。また、さまざまな男女差についての(4)仮説が誘導されているけれども、それらがなぜ単なる「男女差」や「性差」ではなく「ジェンダー」の問題といえるのか、つまり(5)から再び(1)を振り返るといふ点についても、十分な検討が行われたとはいえない。

とはいえ、(1)～(5)に示された分析は、極めて水準の高いものであり、階層意識を含めた社会意識の計量分析の模範ともいえるべきものである。また、先行研究だけでなく、自己の理論モデルやデータ分析結果についても相対化して冷静に評価しようとする分析態度は、あくまでも論理的であろうとする姿勢ともあいまって、読者の知的好奇心を刺激し、一種「爽快」ともいえる読後感をもたらす好論文である。さらに、「女性の階層意識のパラドクス」の傾向を具現するクラスターの存在と心理的傾向を明らかにしたという成果は、本論文も主張するように、階層意識研究への大きな貢献である。

以上の点から、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。